

し え ん 便 り

みくまの支援学校



「巡回相談より」

巡回相談では、理解啓発パンフレットや巡回相談実施後アンケートを使って、地域支援の充実を図っています。また、研修パッケージ『自立活動について』『苦手のある子どもの理解と支援』を使って、地域の学校へ講義にも出かけています。2 学期は保育所、幼稚園、小学校、中学校から 8 件の相談がありました。主な内容としては、行動面（集団授業での指示理解、姿勢の保持、感情のコントロール、コミュニケーションの困難さからくる友だちとのトラブルなど）、学習面（肢体不自由や聴覚障害のある児童生徒の障害特性からくる学習面の支援方法、授業の手立てや支援、書字の困難さ）、不登校の児童生徒の保護者への支援についての相談がありました。

今後とも巡回相談や教育相談をご活用いただければと思います。

相談窓口の紹介 Tel.0735-31-6101



ぐるぐるまるの先へ～ハウセキノジュギョウ 「矛盾を乗り越える力」

梅雨のはじめ、雨がしとしと降り続き外遊びがなかなかできない、そんな日でした。

「みなさん、さようなら！」終わりの会が終わってクラスのみんながお迎えのお母さんの元へ駆け出す中、Kさんは教室の床一面におもちゃを広げ座り込んでごっこ遊びを始めました。もちろんKさんのお母さんもお迎えに来られています。

Kさんは小学校6年生、ダウン症。友達思いで音楽やダンスが大好き、文字にも興味が広がってきている明るい女の子です。このKさんの突然の帰宅拒否に早速職員会議が開かれました。

～終わりの会のあと、突然おもちゃ箱をひっくり返してごっこ遊びを始めたKさんの行動をどう理解しどう対応するのか？～ 担任らは、いきなりの行動に戸惑ったものの、指導の方向はすぐ決まりました。

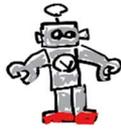


[子どもたちは、その発達の過程で、一見立ち止まったり、うしろに戻ったり、わき道にそれたりする。この矛盾に満ちた“危機”のときこそ、手をさしのべてほしい、手をつなぎたい、「きっとだいじょうぶ」といってほしというねがいを、きわめて不器用な方法で周囲に伝えようとしている]

引用文献：龍谷大学社会学部教授 白石 正久著「やわらかい自我のつぼみ」P.68
第2章 ～子どもの思いを受け止める 発達の危機と矛盾～2011年 全障研出版部

職員同士が発達について学び合う現職教育の中で、何度も確認してきた発達観でした。

Kさんの突然の下校拒否は、彼女が発達の新しい扉をいっしょに開こうと私たちに向け賢明に、その小さな手を広げ呼びかけている姿ではないか…職員会議が出した答は明確でした。



「いっしょに遊ぼう！」



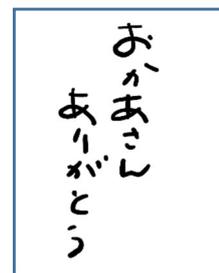
全職員合意の下、その日スタートしたKさんとのごっこ遊びタイムは、時には教室の蛍光灯を灯すまで続いたこともありましたが、Kさんは毎回納得するまで遊ぶと自らランドセルを背負い「かえろ！」と、笑顔で担任の手を引きました。そんなKさんの様子からこの“授業”が間違いないことは職員の間で確信となっていきました。

そうしたKさんとの充実したごっこ遊びタイムは、蝉たちが大合唱の準備を進めだした頃、突然最終回を迎えることとなります。その日も終わりの会のあと、いつものようにごっこ遊びを始めようとする私たちにクルッと背を向けロッカーの方へ歩き出したKさん。ロッカーの前に立ち、中のランドセルを強くつかむと勢いよく弾みをつけて背負い上げたのでした。そして大きな笑い声と「さようなら！」の弾む声。みんなの拍手。

Kさんはその後、一切帰りを渋ること無く小学部を卒業、中学部では書きことばの世界を広げていきます。

みくまの支援学校開校まであと4年、当地方の障害児教育に小さな光を灯した「はまゆう養護学校東牟婁分教室」での実践でした。

(文責：浦木)



Kさんが初めて書いた文字・文章
※本字は浦木筆。

